絵本通宝志巻之五下目録

四愛堂　梅　竹　蘭　菊

林甫籠中鶴　疎影梅月　東坡竹

山谷蕙　淵明菊

途中雨　雪中詩

七賢舞楽　手瓶妙鏡　陳康粛公

董伯苑　小児大陽論

呉道玄僂小畫身を免る圖

侯先生　鉄拐先生

半諾尊者　大鑑禪師

鍾馗　布袋

豊干禪師　寒山拾得

壽老人　上帝之像

大黒之像

四愛堂　梅竹蘭菊　四愛の物何畫工乃骨髓なり

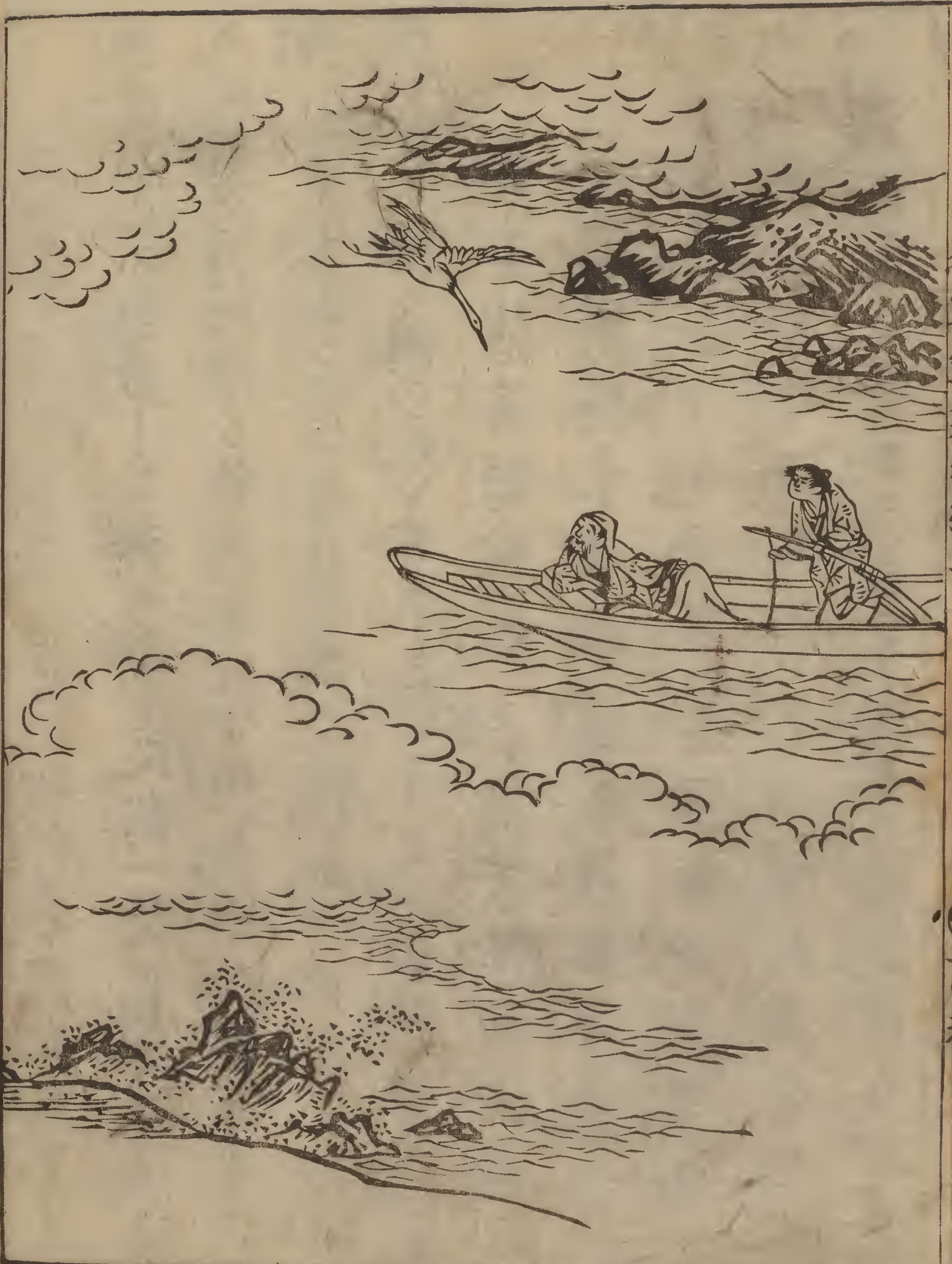
林逋孤山に隠居して梅を愛し又鶴一雙を飼放く雲より入又籠の内に帰る林逋常に小船を浮て西湖の諸寺に游ぶ家に客來とれハ童籠を開く鶴を放川良あつて林逋船を棹く帰る鶴の飛を客來る證とす又林和靖が疎影詩に

衆芳揺落獨暄妍　占斷風情向小園

疎影横斜水清淺　暗香浮動月黄昏

霜禽欲下先偷眼　粉蝶如知合斷魂

幸有微吟可相狎　不須檀板共金樽

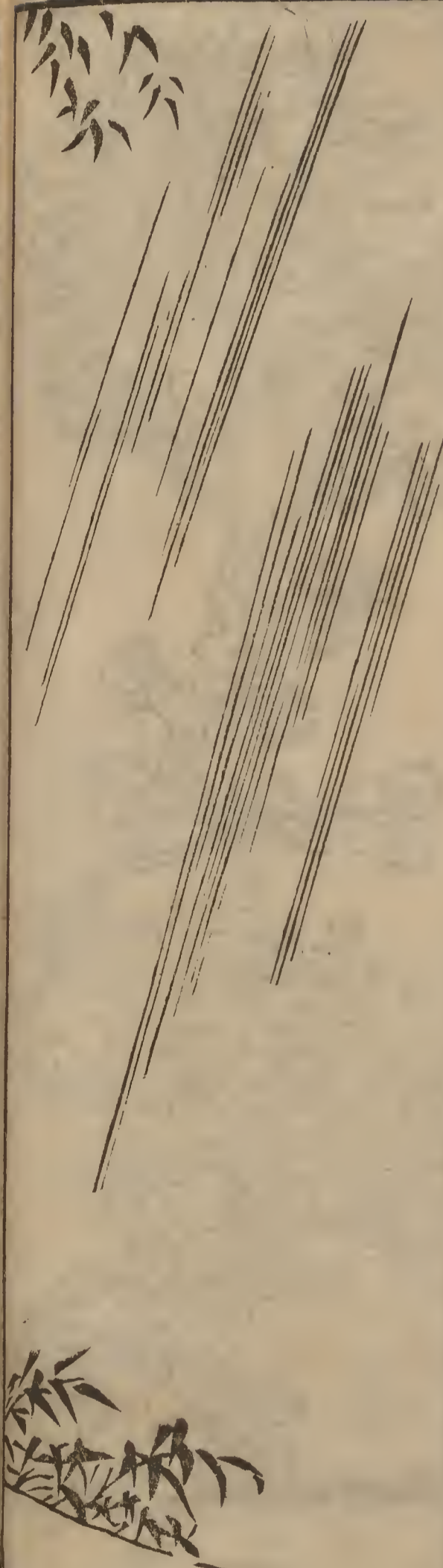
以此意圖畫則梅月流水圖也所謂梅月圖ハ此詩より出る也

緑筠軒　蘇東坡

可使食無肉
不可居無竹
無肉令人瘦
無竹令人俗
人瘦尚可肥
俗者不可醫
傍人笑此言
似高遠似癡

竹ハ虚にしてゆがまず程よく節ありされバ君子の徳に比してこれを愛し周茂叔の蓮を愛するごとくにそまぬと雲気し淵明の菊を表の花乃景とめでそへど秋風黄落のおりは咲淵明の隠逸なるをはひとしきゆへなり

菊有異於物者
凡花者
以春盛
實以秋成
其根抵枝葉
無物不然而
菊獨以秋花
悅茂於風霜
搖落之時
此其得時者異也

途中逢雨寄無処　散笠破風失意志
群竹雙林聲不聴　平常愛是獨吟詩

侍者ハ蘇軾志方へ行路まて俄の雨に逢常に着る竹皮笠風に
破られて雨をしのぐ方なく竹藪の中へにげ入雨をしのぐさるより
一入竹を愛せしとなり平常竹を愛せしゆへ竹ニ而の雛を迎え
と竹に作せしと云　又竹笠木履を着るハ左遷せし藍田史の文を
ある嬉しひ像を寫すとなり
又文与可が門人ニて墨竹の名手あり

韓愈唐代人自孟軻以來中興真儒而文章魁古今元和十四年正月獻佛骨表諫憲宗逆鱗被左遷潮州刺史途中大雪路埋衆馬不前時姪清夫作雲横秦嶺句思出體寫也

雲横秦嶺家何在
雪擁藍関馬不前

晋七賢
舞樂之圖
山濤
劉伶
王戎
向秀

ゲンカン
阮咸
ゲンセキ
阮籍
ケイカウ
嵆康

陳康粛公ハ弓上手なり吾家園に出て弓を射られけるに油を売翁
ながらく見て去らずうなづき居たり粛公問汝ハ弓射る術をしる

翁答て異事なしと云粛公怒て汝如何なれば我が弓をさハ云ぞ翁我常に
油を斗て知るとて小壺の口に一銭を置柄杓をもって油を汲銭の穴から
油を注入れしかも銭を濡さず是我が数年の練磨による公の弓も定で
此知りそ候らんと言ふ粛公云堪なくして笑たり

董伯華ハ成化の間泉州ニ居せり能風を呼雨を喚ぶ事ならずと云ことなし
又雷の畫を賣一雷符を錢一文ニ賣兒童これを買て符を手の掌ニ置し
雙門樓に到て手を開ば雷鳴
聲に應じて震後ニ
清源山ニ登去

小兒兩人日を論ず一人の曰日始て出る時ハ人間と
去る事遠し稍ゆくハ日出る初ハ其大さ車蓋のごとし半天ニおよんでハ大さ
盤のごとし是近き物ハ大ニ遠き物ハ小さく見る理ありと云又一人の曰日の
出る時ハ人を去る事遠し半天ニありて去る事近し故ハ日始て出る時ハ暑
からず半天ニ成てハ暑きこと甚し是近きハ暑く遠きハ暑からぬ理也と云
右ハ列子の文なり

呉道玄ハ唐代の名畫多り宮中に粉墻あり明皇道玄を召て山水を畫しむ道玄が曰此山下に小洞あり中に仙ありと指さしてこれを撃ば忽然として門開く側に童子ありて招く道玄奏して曰洞中甚佳なり臣請先入らん願ハ陛下継来たまへと云遂に洞中に入手をもて上を招く上入ことを能ハず須臾して門閉る玄が行所を知ことなしと云

鉄拐先生

半諾迦尊者
十六羅漢之内

大鑑禪師　變國の人言通じて文字あし俗名恵能と云家貧しく
薪を採賣て母を養ふ金剛經を悟り佛道を深くねがひ黄梅寺の五祖
弘忍大師に謁して寺にあり大衆の飯米を踏で業とれ一老の法丈と
號て能光とあらため弘忍より佛偈を授りしも大俗まそ佛道を
たもり南方に到り漁に交り魚汁を吸後に髪を去

終南山進士鍾馗　唐玄宗夢に大鬼と見る鬼のごとく先代
我死せし時皇帝とたまふて大臣に命じ葬らる恩を謝せんが為
来ると云故に作ハ霊鬼形ハ大臣のすがたなり

布袋

四明之僧也
形肥腰垂て
額に皺あり
常に布の袋と
杖よりかけ市中に
入く物と乞布の袋と
持ゆへ名を布袋と
いふなり

豊干禅師赤城の道にて赤子の啼聲を聞我ハ今かし捨子を見て帰く則
拾て寺に帰り育ゐ拾得と名つく又國清寺の北に寒山あり寒山といふ
此山より異人来り拾得と佛乃以て交る是人ハ寒山より来る故に
寒山子と名つく拾得兼て我食を分ち筒に入置これを贈る寺僧あやしミ
拾得が外に出し間に来るを捕て打擲す是人大に笑て去

壽老人
東方朔なりと云
上帝
身長五尺闊三尺
首其半にあり
赤袍を着る
世に福禄壽と云
側に白鹿を畫く
白ハ長壽を寫す
鹿ハ子孫を添ふと命
長き物なるゆへ祝されし
いはゆる也
巨靈ハ白虎
張果ハ白驢
候先生ハ白蝦蟇
又仙家の霊鶴ハこれ丹頂と云く
何も年を積て白色となるなり也
寫錦後編五
四十

大黒　北方の天神なり
五穀の神なり

全体円像なり
後ハ太極の袋を負ひ
前ハ渾沌の槌を執
陰陽変動静合して
萬物化生の像なり
又表を彩るハ天の色也
黒の字を用ゆるハ子の
方を表するなり
黒き頭巾を着るも
北理なり
足下の俵ハ五穀
成就の儀とする也